

エリザベス・ハミルトンの 『ヒンドゥー・ラージャの手紙の翻訳』について

小西真弓

序

エリザベス・ハミルトンの『ヒンドゥー・ラージャの手紙の翻訳』(1796年)は、インド北部アルモラのラージャ、ツァミーラがロヒラ戦争の末期にイギリス軍人と親交を結んだ縁でイギリス本国へ渡航し、その体験を文通によって同胞へ伝える物語である。スタイルという観点からはモンテスキューの『ペルシア人の手紙』(1721年)やオリバー・ゴールドスミスの『世界市民』(1762年)を手本にしたような書簡体小説に分類されるが、ロヒラ戦争を背景にしているこの物語は、東洋人の新鮮な目を通して西洋の風俗習慣を風刺しているばかりではなく、イギリスの植民地主義を一つのテーマとして取り上げている。確かにヒンドゥー文明の保護者としてイギリス人がインドを統治することを弁明した予備論説(Preliminary Dissertation)や、この物語がウォレン・ヘースティングズに献呈されたことに注目すると、『アナリティカル・レビュー』が批判するように、¹⁾オリエンタリズムに心酔した作者が、イギリス植民地主義を容認していることは否定できない。しかし、被支配民族のヒンドゥー教徒がイギリス社会を批判し、女子教育問題が問われる『ヒンドゥー・ラージャの手紙の翻訳』では、サイドの批判する一枚岩的なオリエンタリズムや植民地主義とは異なった女性作家特有の見解が反映されているように思われる。本稿ではこの作品の粗筋を紹介しながら、ハミルトンの文化、社会に対する複合的な見解を考察してみたい。

I

『ヒンドゥー・ラージャの手紙の翻訳』の主人公ツァミーラがカーストの掟を破ってあえてイギリスへ渡るきっかけとなるのは、ロヒラ戦争に遠征した東インド会社の軍人チャールズ・パーシーとの出会いである。原住民からすれば、ロヒルカンドの平原が焼き尽くされ血で染まったその戦争は、アウドとイギリスの謀略による侵略戦争と呼べそうなものの、長年

*テキストにはElizabeth Hamilton, *Translations of the Letters of a Hindoo Rajah*, ed. Pamela Perkins and Shannon Russel (1796; rpt. Toronto: Broadview, 1999)を使用した。本文中の括弧内の頁数はすべてこの版によっている。

1) "Hamilton's *Letters of a Hindoo Rajah*." *The Analytical Review* 24 Oct. 1796: 429-31.

イスラム支配者の圧制のくびきに喘いでいたツァミーラにとって、ハーフィズ・ラフマート・カーンの率いるロヒラ軍がイギリス軍によって撃退されたという知らせは朗報であった。イギリス人こそ、「自分たちの不幸な国をずっと圧迫してきたアフガンの王たちの怒りを抑制する慈悲深い人々」(78)であり、ヒンドゥー教徒の平和な生活やアイデンティティーを取り戻してくれる救世主のようにも感じられた。そのために彼は、自宅付近で戦争によって暴徒と化した小作農に襲撃されて負傷したパーシーを放置できず、身の危険を覚悟で彼を「客人」としてかくまう。ツァミーラの懸命の看護も虚しく、パーシーはやがて他界してしまうが、彼との会話や聖書の教えに影響を受けた彼は、「人間性について今までとは異なった観念を抱くようになる」(82)。ペルシア語で書かれた文学や歴史書の中では、「人間性は例外なく墮落によって邪悪になる」という説や「人間の弱さや罪業」ばかりが強調され、古代ローマ人には度々「無法な侵入者で恐れを知らぬ世界の征服者」という非難が浴びせられている。しかし古代ギリシア・ローマの思想やキリスト教の精神をパーシーから教えられたツァミーラは、「……ヨーロッパではアジアのように奴隷制によって人間が蔑まされたり、専制君主が権力で人々を頹廃させるようなことはなかった」(82)と思い込み、アジアに対するヨーロッパ社会の卓越性を認めるようになる。もしヨーロッパが人類の自由、平等というキリスト教の原理に支えられているとしたなら、そこには戦争もなければ、アジア的な専制君主も存在せず、人々は平和で幸福な生活を営んでいるように感じられた。そんな幻想を抱いたツァミーラには、イギリス人がイスラムの専制君主に代わって支配権を握ることはインドにとって理想的なプロジェクトのように思われた：

イギリスの善良な人々よ！ 彼らは自分たちが享受している自由という恩恵をすべての人々に授けることを望んでいる。そのような理念をもって、彼らがアメリカの広大な地域を指導して啓蒙化しようと植民地にしたことは疑う余地もない。美德や自由を愛するように説くために、彼らは大西洋の彼方の島々を開拓した。そして我々の国を圧制者の手から救い出すために、この勇敢で寛大な人々はヒンドスタンの地を訪れたのだ…… (84)

このようなツァミーラの幻想に、文通相手でロヒルカンドの徴税人(ザミンダー) マンダラとその友人でバラモンのシャマルは、自らの体験を振り返って、イギリス人が奴隷制を容認したり、不貞の罪を金で贖うほど道徳心や宗教心を欠いていること等を主張して彼の目を醒まそうとする。しかし、聖書の教えに心酔し、パーシーの手紙を届けた縁で知り合ったイギリス軍所属のグレイ大尉やデンビィ医師に歓待されたツァミーラは、彼らの話がどうしても信じられない。科学的精神が発達し、サンスクリット語の知識もあるイギリスの高官たちは魅力的で、彼らが統治するインドの整然とした町は、イスラム支配者に踏みじられて荒廃した村とは別世界のような印象を受けた。イギリスへの憧憬を禁じえないツァミーラは、グレイ大尉やデンビィ医師の縁故を頼って、ロンドンへ向かう航海に乗り出す。

ツァミーラがイギリスで幻滅の悲哀を味わうことは、形骸化したキリスト教信仰や無神論を批判するパーシーの最期の手紙から予測されるが、植民地政策に関する限り彼は一度も批判的な言葉を口にしない。ロンドンのカフェで、見知らぬイギリス人から「あなた方の帝国

を荒廃させ……あなた方の親切な保護者である勇敢な武将の民を絶滅させたのは我々です」(245)とロヒラ族に対するイギリス軍の非道を陳謝されても、彼はその人物を「正気ではない」と相手にもしなければ、新聞の報道さえ偽りとして問題にしない。このようなツァミーラのイギリス植民地政策に対する見解は、『アナリティカル・レビュー』に述べられているように²⁾、ロヒラ戦争をめぐるヘースティングズの問題が議会で追及されていた時代背景を考慮すれば、読者にはそのまま受け止められなかったに違いない。物語前半の中心的なテーマとなっているロヒラ戦争は、そもそもロヒルカンドの民衆を暴君から救うためではなく、マラータの脅威を恐れていたヘースティングズが、緩衝国を強化するためにロヒルカンドをアウドに併合するための戦いであった。イギリス軍がエドマンド・バークの指摘するほど、ロヒルカンドの人々に極悪非道の限りを尽くしたかどうかは明らかではないが、³⁾アウドの太守から援軍の謝礼として多額の金を搾り取ったり、不服従や反逆を口実に法外な罰金を関係者に課したこと等を考慮すると、たとえヘースティングズが法律的に無罪放免されたとしても、多くの罪のない犠牲者を出したその戦争に対する彼の道義的な責任は否定できない。ロヒラ戦争の結果、財政的に逼迫していた東インド会社の金庫が潤ったことを考慮すると、ジェームズ・ミルの「かくのごとくロヒラ族を滅亡させようと躍起になった動機は金だった」⁴⁾という指摘も的外れではないように思われる。

II

ツァミーラのロヒラ戦争に対する見解が、多少なりとも作者ハミルトンの楽観的な植民地主義を反映していることは否定できないが、この点に関しては彼女の生い立ちと時代背景を考慮しなくてはならない。1758年にベルファストで生まれた彼女は幼い時にスコットランド商人の父を失い、スターリングに住む父方の叔母のもとで養育されたと言われる。⁵⁾当時の中産階級の女性としては十分な教育を受けるほど叔母や叔父からは可愛がられたものの、20歳前後で母親や叔母に他界され姉や兄とは長年の別居暮らしで、しかも伴侶にも恵まれなかった彼女の生活は、恐らく経済的に行き詰ることはなくても何かしら物足りない寂しいものであったに違いない。文才を発揮しようにも、当時は女性が高尚な学問を受けたり政治・社会評論を執筆することはタブー視され、彼女の文学活動はごく狭い範囲に限られていた。しかし、屈折した思いで適齢期を過ごしていた妹の心中を察した兄チャールズは、東インド会社の軍人として滞在中のインドから文通によって彼女を励まし、インド情報を伝えてその知的好奇心を刺激した。

2) *Ibid.*

3) この点に関しては、Sara Suleri, *The Rhetoric of English India* (Chicago: The University of Chicago Press, 1992) 60を参照。

4) James Mill, *The History of British India* (1817, rpt. New Delhi: Atlantic, 1979) II, 509.

5) エリザベス・ハミルトンの伝記的事項については、*The Dictionary of National Biography*, ed. Leslie Stephen & Sidney Lee (1913; rpt. London: Oxford University Press, 1993) VIII, 1031-32を参照した。

兄からオリエンタリズムを吹き込まれた彼女は、一時帰国した彼がヘースティングズの依頼で取り組んでいたイスラムの法典『ヘダヤ』(*Hedayah*)の翻訳を手伝い、インド文化に対する関心や知識を深めていった。確かに『マンズリー・レビュー』で批判されているように、⁶⁾ ハミルトンのインド理解には誤解や浅薄さも目立つが、『ヒンドゥー・ラージャの手紙の翻訳』に添えられた膨大な注や予備論説からは、彼女がいかにかに兄や他のオリエンタリストの研究からインスピレーションを受けて勉学に励みこの物語を完成させたかが窺われる。物語の背景になっているロヒラ戦争の描写は、チャールズの『ヒンドスタン北部地方のロヒラ・アフガン族の政府の起源と発展、その最終的な崩壊の歴史的關係』(1787年)⁷⁾を基にしたものであろうし、ウィリアム・ジョーンズやチャールズ・ウィルキンズらのインド文学の翻訳は、直接インド体験のなかった著者にとってその思想や風俗習慣を描くためになくはならないものであった。しかし、女性故に知的な高等教育が受けられず、兄に早世されてしまった彼女は、『ヒンドゥー・ラージャの手紙の翻訳』を出版するにあたり、「それは女性に割り当てられた狭く縮められた道をずうずうしくも逸脱してさ迷った挙句に出来上がった作品として、他人から酷評されるかもしれない」(72)という言葉をつけ加えるほど、男性の領域に挑んで執筆した作品が世間に認められるかどうか不安であった。そのために、「ヘースティングズ殿に献呈する」(54)という献辞も必要だったと思われる。植民地主義の是非はともかく、インド学の価値を高め、ジョーンズらの研究を奨励したヘースティングズは、彼自身オリエンタリストであり兄の後援者でもあった。そのために、当時の東インド会社の植民地主義を批判することは彼女にとってタブーであった。無論、植民地主義に潜在する悪徳に対しては認識があったが、兄チャールズと同様に、彼女にはインド学に対するオリエンタリストたちの貢献はその罪を償ってなお余りあるように感じられた。⁸⁾ 予備論説の冒頭にはそのような彼女の植民地主義に対する見解が反映されている：

肥沃なヒンドスタン地方は、いち早く啓蒙化され最大の力をもったヨーロッパの人々の注目を集め、その征服欲や獲得願望を喚起した。彼らの欲望や願望は学識のある者や好奇心に富んだ人々に知識や情報を開示させる原動力となり、文学界の産物に宝物を加えた。その宝物は形のあるものではないが、商業的な豊さより永続性のある性質をもつ。過去数年間に世間から歓迎された様々な東洋言語の数多くの優雅な翻訳は、価値のあるものとして注目を集めてきた。そしてこれらの翻訳が誰によって始められたのか知りたいという好奇心を呼び起こしたが、一流の文学的名声をもつ者の労作によってそのような好奇心は満足させられた。(55)

6) “Miss Hamilton’s *Translation of a Hindoo Rajah’s Letters*.” *Monthly Review* 21 Oct. 1796: 176–80.

7) *An Historical Relation of the Origin, Progress, and Final Dissolution of the Government of the Rohilla Afgans in the Northern Provinces of Hindostan: Compiled from a Persian Manuscript and Other Original Papers* (London: G. Kearsley, 1791).

8) このような見解はチャールズ・ハミルトンの『ヘダヤ』の序の一説に符合する：

有益な知識の普及、偏見の根絶は、拡大された帝国や商業活動の最も輝かしい業績ではないにしても、確かに特に大切である。自然科学への道を切り開くこと、どんな形態に見えようと、いかなる言葉で伝達されようとその自然科学を受容すること、それが部分的に征服の罪を贖い、領土の獲得のために頻繁に犯された悪の代償となる。 *The Hedayah, or Guide: A Commentary on the Mussulman Laws*, trans. Charles Hamilton, 4 vols. (1791; rpt. Delhi: Islamic Book Trust, 1957) I, iii.

ハミルトンの植民地主義に対する弁明は、ポスト・コロニアルの現代から振り返ると、我田引水的な発想として批判を免れない。しかし、穿った見方をすれば、スコットランド人の父とアイルランド人の母をもち、スコットランド、イングランド双方の文壇で活躍した彼女は、自らを「ブリティッシュ」(the British)と見なし、異民族がより高度な文明をもつ帝国の支配下に下ることにあまり抵抗を感じなかったのかもしれない。またヘースティングズを弾劾したバークでさえ、植民地支配そのものを否定しなかった事実や彼の奮闘にもかかわらず、ヘースティングズが免罪された時代背景を考慮すると、ハミルトンの楽観的な植民地主義も、イギリス文化に幻想を抱いたヒンドゥー教徒の口を借りて述べられているとしたなら、当時の読者一般からはあまり批判されなかったのではないだろうか。さらに、ツァミーラのイギリス観が、マンダーラやシャマルルによって最初から否定されるばかりではなく、彼が最終的にはイギリス人の心にさほど聖書の教えが浸透していないことを認識して失望するというプロットの展開は、イギリスの植民地主義を謳歌するツァミーラの語りとハミルトンの声が完全に一致するものではないことを暗示しているように思われる。

III

ハミルトンの兄が所属していたベンガル・アジア協会のメンバーが、ヘースティングズの依頼でサンスクリット語やペルシア語の文献の研究や翻訳に取り組み始めたのは、インド統治の安定や効率化のためであり、学術的な興味からではない。しかしジョーンズをはじめとするオリエンタリストらは研究を進めるうちに、古代インド文明に純粋な学問的価値を認めるようになった。確かに当時のインドは無政府状態ではあったが、かつてそこには古代ギリシア・ローマ文明に比肩するような文明があり、サンスクリット語はラテン語やギリシア語のような高度な言語であることが明らかにされた。そのために、ヒンドゥー教徒を野蛮人と見なすべきではないというのが、彼らの一般的な考え方になった。また、ジョーンズは、ヒンドゥー教の聖典『ヴェーダ』の中に万有引力の法則を発見したと発表したり、インド人とヨーロッパ人は文学、言語的な「共通の起源」をもつのではないかという学説さえ編み出した。⁹⁾ そんなロマンチックなオリエンタリズムは、イギリスのみならずヨーロッパ中に東方全体への憧憬を喚起し、経済的搾取を伴う植民地主義が進展する一方で、東洋に自己のあるべき姿を模索するという精神運動として19世紀以降も命脈を保ち続けた。それはまた、東西の言語や神話、宗教に関する比較研究を導き、インド人に自らの民族文化を誇る精神を覚醒させ、民族運動の発展にも影響したと言われている。なるほどイギリスでは、1810年代から功利主義や福音主義の台頭に伴ってインド文明に対する畏敬の念は消失し、人種差別的なイギリス化政策が推進されるようになったが、少なくとも18世紀末のオリエンタリズムには、インドに対する共感があったと言えるのではないだろうか。それはサイドが批判す

9) ウィリアム・ジョーンズのオリエンタリズムについては、浜林正夫、神武康四郎編『社会的異端の系譜』(三省堂、1989)、147-67頁参照。

る非ヨーロッパの他者性を強調する二項対立的なアプローチではなく、東西の差異を描きつつもその差を縮めて、共通性を探求するものであったように思われる。ジョーンズ流のオリエンタリズムは、産業革命の進展で歪んだ社会を変革したいというロマン主義のシェリーやバイロンのような詩人の想像力をかき立てたばかりではなく、極めて保守的な傾向をもつハミルトンの心をも捉えたのであろう。ヒンドゥーの神々がギリシア・ローマ神話の神格と符合するという彼女の予備論説の一節からは、ジョーンズが提唱した「共通の起源」説がいかかに彼女に影響を与えたかが窺い知れる：

一番上のランクは智恵の神ガネッシャで、彼はギリシア神話のヤヌスだと考えられる。戦いの神カールッティケーヤの武勇は、ローマ神話のマルスに劣らない。学問の神サラスヴァティーは、科学と芸術の守護人であるが、彼女を飾るパルミラや葦の葉、ペン（筆記用具）は、ギリシア人の女神ミネルヴァを飾る長槍や盾より適切にその神格を象徴している。愛の神カーマは、ウィリアム・ジョーンズによれば、ギリシアのキューピッドの双子の兄弟ということだが、キューピッドよりも生彩のある多くの装飾品を持っている。そして、古代のヒンドゥーの吟遊詩人に語られた素晴らしい頌歌からこの神話的な神格を形作るとすると、そのカムデーヴの卓越性は明白である。最後に、7頭の馬にひかれる戦車に乗った太陽神スーリヤはとでもアポロの神に似ているので、その7頭の馬はアポロの馬と同じだと認めざるを得ない。(64-65)

このような見解は、人類の起源はすべてノアの子孫であるという旧約聖書に基づいたジョーンズの思想から生まれたもので、人類学の発展に伴って19世紀には次第に省みられなくなったが、キリスト教の装いを帯びているために、信仰心の厚いハミルトンにとっては説得力があったと思われる。しかし、この点に関して留意しなくてはならないのは、ハミルトン兄妹を含め、初期のオリエンタリストたちが憧憬を抱いたのは、古代インド文明であり、当時のインド社会ではない。彼らにとって「野蛮な外敵イスラム教徒に踏みにじられて荒廃した」18世紀末のインドは、ヨーロッパより遥かに後進的な墮落した社会に感じられた。そこにイギリスの司法、行政制度をもたらすためには、支配者である自分たちとインド人の間には一線を画さざるを得なかった。しかし、当時イギリス本国において「内なる他者」と差別され得たアイルランド人とスコットランド人の混血でしかも男性に支配されるべき「女性」であったハミルトンは、その線引きにあたり感傷的にならざるを得ず、彼女の引いた境界線は極めて不明瞭だという印象を受ける。

IV

ツァミーラがイギリス文化を真に理解し難いインド人として描かれていることは否定できないが、その言動を分析してみると彼にはイギリス紳士と比べて遜色のない品性と教養が投影されている。確かにトランプ遊びをキリスト教の宗教儀式と誤解するようなエピソードは滑稽でもあるが、イギリス社会を曇りのない目で観察する彼は、19世紀のイギリス小説の中でしばしば「女々しい」とか「ずる賢い」と形容されるヒンドゥー教徒のステレオ・タイプでもなければ、狂信的な偏見にも捉われない好感のもてる人物である。それ故に彼の風刺

はイギリスの読者に新たな自己認識をもたらし反省を促したのではないだろうか。

ロヒラ戦争の是非はさておき、ツァミーラがイギリス人と接触するうちに、いち早く感じた疑問は、彼らがキリスト教の精神を実践しているか否かということである。イギリス行きの船に乗るためにカルカッタに着き、アメリカ独立戦争にイギリスが関わっていることを耳にしたツァミーラは、彼らが自己防衛や圧制から人々を救うためだけに戦うのではなく、実際にはキリスト教徒の同胞にも「戦争をけしかける」ことに驚く。その理由を平和や寛容性、愛についてしか書かれていない聖書には見出せないで、「福音書には後に補遺が付け加えられて、その中で十分な数のキリスト教徒が集まり、軍隊を組織して……殺人が許可されているのかもしれない」(170)とさえ思うようになる。また大酒を飲み、動物の肉をたらふく食べるという節制のない彼らの習慣もヒンドゥー教徒の彼には、献身的な信仰心の欠如を象徴しているようにも感じられた。

当然のことながら、そんな彼らの妻になる女性たちの中でキリスト教の美德を実践する人物は少数であり、およそ聖書の精神にそぐわぬ彼女たちの言動はツァミーラによって風刺的に観察されている。例えば、ツァミーラがロンドンに向かう船で出会った地主の妻は、「美しければ有利な結婚ができる」(194)と信じて、両親の遺産をすべて衣装につぎ込んで身を飾り、ベンガルに乗り込んで財産家の夫を釣ったという。しかし財産目当ての結婚生活に飽きたのか、彼女は犬や猫、猿等のペットを偏愛し、人間とりわけ貧乏人には横柄な態度で接して周囲を驚かす。またグレイ大尉が一目惚れした「青と銀の衣装を纏った婦人」も彼に財産がないと知るや否や、その求愛を拒否する。彼女たちの財産目当ての結婚観や、貧乏人に対する差別は、キリスト教の人類愛や平等の精神とは相容れないものであった。

イギリス人の信仰に対するこのようなツァミーラの疑念は、ロンドンに上陸後、グレイ大尉やデンビィ医師の縁者と交際するうちにさらに深まる。中でも彼に衝撃を与えたのは、ロンドンの教会内で貧しい民衆ばかりが敬虔な態度で説教を聞き、上流階級の婦人たちは、祈祷の最中にお互いのドレスを比べているばかりで、気分が悪くなった下層階級の老女に席を譲らず追い出すという次のような光景である：

……誰もこの教会に彼女たちが集まる目的は、お互いのドレスをじろじろ見つめる以外の何物でもないことを疑わないだろう。しかし、ごく少数の粗末な身なりをして、礼拝の最中に通路と呼ばれる所に立っている人々に関しては例外扱いしなくてはいけない……彼らは特に貧しい者への福音を説く牧師の説教を悦んで聴いていたし、自分たちが愛されているという思いは、諦めの心を喜びで輝かせたように見えた。そんな感情が表れている一人の高齢な婦人がとりわけ私の注意を引いた。青白い顔が、健康を害していることを物語り、彼女の顔には悲哀の皺が刻まれていたが、それは彼女が纏う寡婦の喪服に似つかわしかった。長い間立ちっぱなしだったので、彼女は今にも気を失いそうで、信者席の番人のように見えた人物に座らせてくれるよう遠慮がちに頼んだ。驚いたことに、彼女は座ることを拒まれた。豪華な衣装で着飾ったキリスト教徒の誰一人として彼女の状況に関心を示さなかった。彼らは通路から神を拝む人々をあたかも劣等人種のように見下しているようだった。(206-07)

このような体験を通してツァミーラは、実際にはシャマールが忠告したように、イギリスでは出生はヒンドゥー教徒の出自ほど重視されないが、階級制度が認められていて、貧富の

差も激しいことを悟るようになる。インドではバラモンでさえ生活のために田を耕すことがあるのに、文明国であるはずのイギリスには全くの有閑階級が存在する一方で、借金のために監獄へ送られる者があるとは、「そこでは貧困が最も凶悪な罪の一つとして考えられるようになってきている」(240) という状況は、彼に幻滅の悲哀を感じさせるばかりであった。

V

ツァミーラが認識するキリスト教精神の欠落という問題に関して、啓蒙思想が普及した当時、理性を重んじる科学的合理主義の影響によって、従来の信仰が軽視される傾向がイギリスにもあったことは言うまでもない。物語の中では、そのような精神風土はグレイ大尉の義姉レディ・グレイの実家アーデント邸に出入りする「哲学者」たちの理性主義や新しい思想に反映されている。中でも極端な思想に走るのは、セプティック博士とその「哲学者」仲間たちで、彼らはキリスト教を不合理なものとして否定するばかりか、法律や政府、私有財産や家族制度が不必要となる「理性の時代」の到来を期待して、¹⁰⁾ 各々の風変わりな「システム」と呼ばれる形而上学的な研究に没頭するようになる。彼らにとって信仰は勿論、人を愛することも、結婚をはじめとする社会制度も無用の長物であり、人間に生まれつき備わった才能を伸ばすために自由奔放に思索し行動することが理想的な生き方であった。それらは理性を絶対視した無神論的な啓蒙思想から生まれた思想とも言えようが、人間性を無視した非社会的な思想で、次のようにグレイ大尉の友人セヴェラン博士によって解説されている：

セプティック博士の意見では、すべての宗教はまやかashiで、下らないそうだ。彼は仲間の哲学者の偶像には礼拝しないが、キリスト教を槍玉にあげている。キリスト教の実践や見解を皮肉ることに情熱を傾ける機会に恵まれた時、彼の緊張した姿は勝利の微笑みでリラックスし、その顔からは憂鬱な表情が消える。自分の胸から社会に対する感情や愛着を一掃することが、彼の人生の努力目標のようだ…… (258-59)

これほど極端な形ではないにしても、ツァミーラはアーデント邸の住民たちと交際を深めるうちに、彼らも多かれ少なかれ啓蒙思想に感化されていることを認識するようになる。まずアーデント邸の主キャブリス男爵は「科学的進歩こそが完全なるものへ到達する」というゴッドウィンの思想に感化されたのか、敷地内の鉱脈探しに莫大な財産をつぎ込んで破産寸前になったり、雀にミツバチの本能を植えつけるという途方もない実験に失敗して300匹の雀を死なせ、ツァミーラを仰天させる。科学的実験を優先して、先祖代々の資産管理や、家族や使用人の保護・監督を怠る彼には、*noble oblige* (身分の高い人が果たすべき義務)の観念が希薄で、尊敬に値する人物としての性格が投影されていない。また彼の妻レディ・キャブリスは、「すべての情念を輝かしい理性の領域に従属させる」(213) 理性主義者で、「最もすばらしい婦人の一人として称えられる」(217) にもかかわらず、その礼儀正しさと優雅

10) 物語の中の「理性の時代」は、トーマス・ペイン (Thomas Paine, 1737~1809) が執筆した *The Age of Reason* (1794-96) のもじりであるが、両者の内容は食い違う。

さは外見だけで、ツァミーラの目に彼女は寛大な思いやりには欠ける冷淡な女性に映る。さらに男爵の姉アーデント嬢に至っては理性を絶対視するあまり、感受性に溺れがちな同性ばかりではなく、男性に依存して家事に励む女性の生き方や「家庭的な美德」さえ軽蔑するようになる。彼女の「男性的な理解力」は、家庭教師から受けた古典教育によって発達したもので、「哲学者」や評論家からは評価されるが、自立や自己実現の手段にはなり得ない。それどころか彼女は「虚栄」や「うぬぼれ」の強い鼻持ちならない存在として一般の女性からは敬遠されるようになってしまう。そのために彼女にとっては、「女性が家事によってその能力を損なわれることもなく……卑しい抑制を打破できる能力によって評価されるようになる」(260)という家族制度を否定した「理性の時代」は、自我を解放するために歓迎されるべき未来のように感じられた。

しかしこのようなアーデント邸の住民たちも「理性の時代」や無神論に感化されたセブティック博士の甥が、従姉妹と婚前交渉をもったにもかかわらず結婚制度を否定して、彼女を自殺に追い込んだことを苦に自らも命を絶った事件には少なからず衝撃を受ける。彼らは、いかに新たな思想にかぶれようと、幼少の頃から植え付けられたキリスト教的な道德観念から逃れることができない事例を目の当たりにして、それぞれ複雑な思いに駆られる。このエピソードは、人間から宗教心を奪うことの危険性を孕む理性主義に警鐘を鳴らすものであり、啓蒙思想に対する作者ハミルトンの保守的な態度を浮き彫りにしていると言える。

ところが、無神論に染まることなく「哲学者としても一人の人間としても尊敬される」(207)セヴェラン博士の言動を考慮すると、理性を絶対視する啓蒙思想に警戒心を抱きながらも、作者がその価値を認めていたという印象も否めない。信仰問題はさておき、本来の啓蒙主義が宗教的、社会的偏見に囚われて権威に盲従していた人々の解放を目指したものであったとしたなら、男女差別的な社会体制に不満であったハミルトンにとって、それは彼女のロマン主義に真っ向から対立するものではなかったはずである。次のようなセヴェラン博士の説は、イギリスの無神論的傾向を批判しながらも、懐疑主義がヨーロッパ大陸の迷妄的な体制や因習を打破したいという人間の理性から生まれたものであり、哲学や科学の発展もそれが「正しい基盤」に置かれて社会全体の幸福を導くものなら歓迎させるべきものであるというもので、作者自身の声を代弁しているように思われる：

ヨーロッパ大陸のキリスト教不信の広がり具合は、分別や良識のある人間が理性の呼びかけに反するので認められない迷信に、国家からどの程度盲目的に従うよう強制されるかに比例している……

このイギリス王国に広がっているキリスト教不信の類は、思想に基づくものではなく、単に口を動かしているだけの懐疑主義だ。懐疑主義者らは、浅薄な理解力や冷淡な心しか持ち合わせていない。彼らはありきたりな方法が続けている人々の注目を集める力がないと感じて、聴衆を驚嘆させたり巧妙さや大胆さで喝采を浴びるような意見を述べて人目を引こうとしている……しかし、気高い私の友人ツァミーラがこのようなキリスト教不信についての解説や、アーデント邸の紳士たちの行動を観察して、形而上学的な探求は何の役にも立たないと考えないように。そのような探求は、人間の精神力を広げて理解力を高めるし、精神の科学も正しい基盤に置けば、社会の幸福を拡大するようになる。(272)

一見途方もないようなアーデント邸の「哲学者」たちの形而上学的な探求がこのように弁明されるのは、彼らの強調する「外的環境論」がジョン・ロックの影響を受けたもので、それが女性の解放へ発展する論理に応用できた故であろうか。なるほど彼らの形而上学的な探求は空論に過ぎないが、女性が男性に劣らない能力を持ち得る可能性を説いた啓蒙思想は、ハミルトンのロマン主義を掻き立てたのであろう。もっとも一口にロマン主義とは言っても、18世紀末のイギリスにはゴッドウィンのような急進的な理性主義者の声も、ヒュームのように感受性を理性の上に置く思想家の影響も大きかったので、各々の作家や詩人の思想は多様であり、ハミルトンのロマン主義を定義するのも容易ではないが、物語の中で提起されているフェミニズムの問題に関連付けると、それは社会的には保守的な傾向をもつ一方で穏健な変革を求め、精神的には理性と感受性の相互作用を重んじた思想であることが理解される。

VI

『ヒンドゥー・ラージャの手紙の翻訳』に登場する人物の中で、最も理想的に描かれている女性レディ・グレイは、感受性と理性のバランスのとれた敬虔な女性である。彼女は感受性が時に自由奔放な利己主義に結びつくことを姪たちに説いたり、「盲目的な甘やかしは結局、子供の将来に幸福をもたらさない」と考えて「母性的な愛着も理性の支配下におく」(222)ほど理性的な判断を重んじる。一方、想像力豊かな彼女の感受性は、無神論的なヒュームではなく、聖書の教えによって発達したと断言されるが、それが彼女の理性に働きかけて様々な美德を発揮する原動力となっている。「そんな彼女の精神は無神論を受け入れるほど広がる力がなかったが」(280)、家政を司るかたわら夫と勉学に励んだり、恵まれない者に援助の手を差し伸べるといふ義務、即ち *noble oblige* を実践する生活は若き日の彼女にとって幸せな生活であった。やがて不幸にも病の床に伏しがちになった夫には、ハーブシコードやフランス語の練習も断念して献身し、彼の死に際しては来世での再会を信じて取り乱すこともなかった。息子は敬虔なキリスト教徒として育て上げ、アーデント家から預かった姪の一人は想像力豊かでしかも理性的な判断のできる立派な娘として養育する。

このように、信仰を重んじつつ従来の家庭婦人の美德を体現するレディ・グレイが、独身生活を通すアーデント嬢よりも理想的に描かれていることから、作者の女性の生き方に対する考え方は一見、伝統的な枠組みを超えるものではないように感じられる。とすれば、ハミルトンのフェミニズムは、出産、育児、家事を果たす家庭婦人の役割の社会的な価値を男性に認めさせた上で、女性の社会的権利を訴えるものであったとも言える。

それにしても、夫が病に倒れようと早世しようと経済的に困窮することのない上流階級の婦人はともかく、十分な相続財産もなく独身を通した中産階級の女性にとって、社会的な権利が剥奪されていた18世紀末のイギリスはどれほど住み心地の悪い社会だったことか。実際に伴侶に恵まれずあえて文筆で身を立てたハミルトンにとって、このような女性問題は全く身につまされるものであったに違いない。今では何とも信じられないような話であるが、

当時のイギリス女性には選挙権もなければ相続権もなく、家父長制の中で男性の従属物として生きるのが慣わしであった。いくら良家に生まれようと、女子に授けられる教育は、一般的には家庭の主婦になるために必要とされた実務的な勉学、あるいは男性を楽しませるための音楽や絵画、社交界で必要であったフランス語のたしなみ程度で、経済的な自立を目指したものではなかった。無論、下層階級に至っては男女を問わず初等教育さえ十分に授けられなかった者も多く、肉体労働に耐えられなかったり、一家の大黒柱を失った女性が家族を支えるために街娼婦になることも稀ではなかった。そんな女性の立場に憤って、男女同権を求めて改革運動に身を投じたのはウルストンクラフトであり、自立のための知的な女子教育を求めた彼女の声にハミルトンが共感したことは、イギリスの女子教育について次のようにシャマルの口を借りて述べられていることから理解される：

私たちはイギリス女性とその適切な領分内で移動しながら、自分たちを飾ること以外の技芸を学ばず、男性の目を喜ばす対象になるという考え方以外は吹き込まれない事実を目撃した。それにしても、愚かなヨーロッパ人が極端な矛盾を暴露したり、そんな修養の足りない女性たちが往々にしてヨーロッパ男性の奥方になったり、時に大邸宅の管理を任せられ、自由にふるまってもいいようにされていることを君に伝えたら、さぞかし驚くだろう。他の点では決して愚かだと見なされないだろうに、イギリスの男たちにとって、たとえ未亡人になろうと自分の子供を妻に託すのは当たり前のことだ。そんなわけで私は、保護するためだとはいえ、小さな子供がドレスのことばかり考えたりトランプ遊びしか仕事と思わず、貧しく頼る者もない未亡人のもとに放り出されるのを頻繁に見てきた。それに比べたら、バラモンの教えはどれほど思慮深いことか……ここインドに限らず、イギリスでも男たちは女が知的に低能であるほど愛すべきものはないと認めている。(129)

この批判に続いて、シャマルはさらにイギリス人がヒンドゥー教徒の女性虐待を非難しながら、同胞の女性が困窮して街娼婦になることは黙殺していることを皮肉る。確かに程度の差こそあれ、ハミルトンの観点からは、イギリス、インドともに女性が自立して生きる権利は男性によって踏みにじられていると思えたに違いない。「バラモンの教え」即ち、未亡人を夫と共に火葬にするヒンドゥー教徒の風習「サティ」まで引き合いに出して、イギリス女性問題を提起する彼女にとって、結婚制度まで解体しようとしたウルストンクラフトの急進的なフェミニズムには同調できなかったとしても、女性差別に対する憤りや、女子教育改革を求める声に関しては、両者には相通ずるものがある。なるほどそれは、神の前での平等という教えに基づいて、女性にも男性と同じような知的な教育を求めるという主張であることから、ハンナ・モア的女子教育論と同じ範疇に属するように思われる。¹¹⁾しかし、その教育を「家庭の美德」を体現する家庭婦人の育成ばかりではなく自立するための専門職業に応用することを認めているという点に関しては、ハミルトンの説はハンナ・モアよりもウルストンクラフト的女子教育論に近いのではないだろうか。このことは、両親や兄を失いつつ文筆で身を立てることに抵抗を感じるパーシーの妹シャーロットと、彼女を励ますデンビー医師との次のような会話に示唆されている：

11) ハンナ・モア的女子教育論については、水田珠枝著『女性解放思想の歩み』(岩波書店、1973)、120-24頁参照。

「面倒を見る両親もなく、采配を振るべき家族もなく、慈善事業に乗り出そうにも財産に恵まれず、友達の役に立つ経済力もない一人の女にとって、人生における仕事の範囲は、どうしてこんなに狭いのでしょうか。」……

「それでは（君の亡き父上に質問させてもらいたいが）、どうして君の精神は教育を受けたり、啓蒙化されて判断力のある人々の話を聞いて啓発されるべきだったのか。その精神の力を君だけの楽しみばかりではなく、他人を導き歓喜させるために発揮したらどうかね。」

「ああ、デンビィさん！ 女流作家がいかに軽蔑されているかご存じでしょう。御婦人たちは、彼女を恐れたり憎み、殿方はあざ笑って嫌うのですよ。」

「……もし君の美德を発揮する精神が文筆家だという虚栄によって損なわれなければ、シャーロットいいかね、君の余暇を純粋で理にかなった仕事に活用しても、愛すべき友達から慕われなくなるようなことはないよ。」
(302-03)

このようなアドバイスに従って、あえて文筆で身を立てたのは他ならぬ作者自身であったが、彼女が周囲からの軽蔑や嘲笑を免れたのは、オリエンタリズムを装った女性問題への問いかけが当時の啓蒙化されたイギリスの読者の心に訴えるものがあったからであろう。しかし、イギリスでは、フェミニズム運動が家父長制を土台とする帝国主義や階級制度と複雑に絡み合ったためか、女性に大学の門戸が開かれたのは19世紀後半であり、参政権は何と1928年まで与えられなかったのが実情であった。ウルストンクラフトやハミルトンの要望は18世紀の後半において一般のイギリス人には実現し難く不可能に感じられた。それはともかく、彼女たちの声が19世紀以降の目覚めた女性たちに受け継がれていったことを考えると、その願いがかなえられなかった人生も、称賛されるべき有意義なものであったと言える。

おわりに

フェミニズムという観点からは、『ヒンドゥー・ラージャの手紙の翻訳』の中では執筆当時のイギリス社会の性や階級による差別が問題にされているだけで、ヒンドゥー教徒に対する人種差別は不問に付されている。それは作者ハミルトンが人類の平等を信じる敬虔なキリスト教徒であり、イギリス人＝男性の支配者／ヒンドゥー教徒＝支配されるべき「女」と見なすような人種観や征服の論理が、男性に従属を強いられる女性という自らの立場を考慮すると、容易には受け入れ難かった故であろう。してみれば彼女のフェミニズムの言説は、イギリス化を推進した人種差別的な帝国主義とは矛盾するものであったと言える。しかし、彼女が実際にはヘースティングズらの植民地主義に寛容であったのは、その政策に「古代ヒンドゥー文明の保護」とかヨーロッパとインドとの「共通の起源」を唱えたオリエンタリズムが絡んで、搾取の実態が隠蔽されがちであった故であろう。もし仮にハミルトンが「メムサーヒブ」としてインドに渡り、ヒンドゥー女性がイギリス男性から性の奴隷として搾取されていた現実を目の当たりにしたなら、売春を認めるようなイギリスの文化や社会制度をインドに押しつけるような帝国主義には賛同できなかつたかもしれない。そう考えると『ヒンドゥー・ラージャの手紙の翻訳』は、ヴィクトリア朝期の帝国主義とフェミニズムとの関わりを研究する上でも再読されるべき興味深い作品と言える。